

2023年5月25日(土)

キャパの見た世界に学ぶ

「崩れ落ちる兵士」と題する1枚の写真で一躍戦争写真家として世界に名を馳せたロバート=キャパの写真展が『一写真家ロバート・キャパ、愛と共感の眼差しー戦争を越えて』と題して、八王子の東京富士美術館で開催されています(6月23日まで)。これに併せて18日(土)午後には、キャパなどが中心になって設立された写真家集団マグナム・フォトの元東京支社(2020年に閉鎖)のディレクターだった小川潤子さんによる講演会がありました。

スペイン内戦、ノルマンディー上陸作戦などに同行したキャパの撮影にのぞむ姿勢やジャーナリストとしての視点ほか、パートナーだったゲルダ TARO の死、その名前の由来、そして1954年春に日本訪問の「ついで」に出かけたインドシナ戦争での爆死、その時に肩に掛けていた NIKON のカメラ、女優イングリット=バーグマンと出会い、それにヒントを得た映画『裏窓』の話など、今回初めて見る写真も情報も多く新たな発見と感動がありました。今日ではほとんどがデジタルカメラになっていますが、フィルムカメラでは現像するまで、何が、どんなに映っているか分からない緊張感と想像力の中で被写体に立ち向かう姿勢と撮影魂に胸を打たれました。「インスタ映え」とはひと味もふた味も違う写真からほとぼり出る社会的正義、望遠レンズに依存せず一歩でも被写体に近づこうとする行動と構図に感銘を受けました。また、良質な番組が少なくなり、週末の早朝や深夜の時間帯に追いやられた現在のテレビ業界にこそ奮起してもらいたいと感じた次第です。

参考文献

ロバート・キャパ、訳:川添 浩史・井上 清一(1979)『ちょっとピンぼけ』文春文庫, 254 頁。

沢木 弘太郎(2015)『キャパの十字架』文春文庫, 400 頁。

校長 石飛 一吉